

平城京左京二条二坊十五坪の調査

—第501次

1 はじめに

本調査は奈良市法華寺町内での宅地造成に先立つ発掘調査である(図244)。宅地造成地内の道路予定部分(東西36m、南北6mの調査区)と擁壁部分(西側のL字形調査区と北側の調査区)に調査区を設定した。総調査面積は約320㎡。それぞれを東調査区、西L字調査区、北調査区と呼称する。調査区は、阿弥陀浄土院の東隣の坪にあたる平城京左京二条二坊十五坪のほぼ中央に位置する。調査期間は、2012年11月5日から12月14日までである。

2 基本層序

調査地内には、調査以前に染色工場が建っており、工場設備等の影響で一部攪乱を受けていたが、概ね遺構が残存していた。基本層序は、上から造成盛土(厚さ約50~60cm)、旧耕作土(20cm)、床土(30cm)、整地土(約20cm)、地山である。整地土は、東側では褐色礫混じり土と褐色粘質土、中央部で茶褐色土、西側では赤褐色土や灰褐色土、灰色砂が見られるなど、場所によって異なる。地山は、概ね茶色粘質土、黄褐色粘質土だが、東側では自然流路と考えられる灰色粗砂がその上にのる。地山は、東調査区のほぼ中間から東側に向かって標高を下げる。遺構検出面は、床土下位の整地土面で、標高は、調査区全体で約61.0m。地山(黄褐色粘土層)の標高は、調査区東方で60.6m、西方で約60.8mである。

3 検出遺構

掘立柱建物3棟以上、掘立柱塀2条以上、柱穴列6条以上、溝6条、土坑12基以上を確認した。ただし、調査区が東西に細長いため、建物や塀については、今後の調査によって見解を改める必要があるかもしれない。検出遺構のうち、建物群は基本的に奈良時代に属するが、多くの溝や土坑は、出土遺物から中世以降のものと考えられる。奈良時代の遺構は、重複関係や柱筋の位置から、少なくとも4期に区分可能であり、中世以降のものを加えると5期に区分できる。以下ではその時期区分ごとに主要な遺構を説明する。

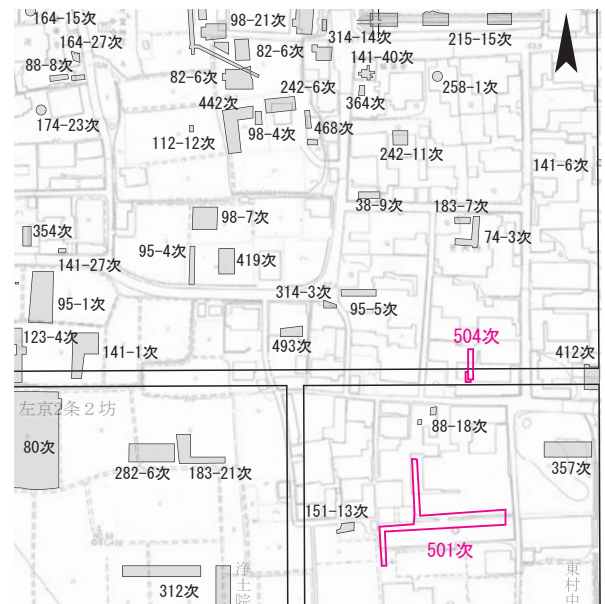


図244 第501次調査区位置図 1:4000

1 期

東西溝SD10320 長さ9.6m以上、幅2.2m、深さ40cmの素掘溝で西流する。東調査区中央付近で痕跡が確認できなかったが、後述する南北溝SD10339と接続する可能性がある。大きく2層に分けられ、上層には褐色土、下層には黒褐色シルト、白色砂が堆積する。当初流れがあり、腐植土がたまった後、埋められたものと理解できる。両層ともに多くの遺物を包含するが、奈良時代前半の土器を多く含む。重複関係がある掘立柱建物SB10330・10335・10340、柱穴列SA10333のすべての柱穴に切られており(図247・248a-a'、b-b'、d-d')、出土遺物の年代観とも調和的である。

2 期

掘立柱建物SB10335 梁行2間、桁行1間以上の南北棟。柱間は3.0m(10尺)等間。柱穴の大きさは0.7~0.8m四方、深さ50cm前後。この北側1.8m(6尺)のところに廂が付く可能性がある。東西溝SD10320を切る(図247・248c-c')。

柱穴列SA10322 2間分を検出した。柱間は2.7m(9尺)等間。柱掘方は0.5~0.6m四方。深さは残存部で約50cm。

柱穴列SA10333 南北1間分を検出した。柱間は3.0m(10尺)等間。柱掘方は南北0.6m×東西1.0m以上の長方形を呈する。深さ70~80cm。底面には複数枚の礎板を敷き、北側の柱穴にはその下方に扁平な礫を敷く(図247・248b-b')。掘立柱建物SB10340の柱穴を切る。

柱穴列SA10345 南北1間分を検出した。柱間は3.0m(10尺)等間。柱掘方は0.6m四方、深さ40~50cm。



図247 第501次調査区遺構平面図 1:250、南壁断面図 1:125

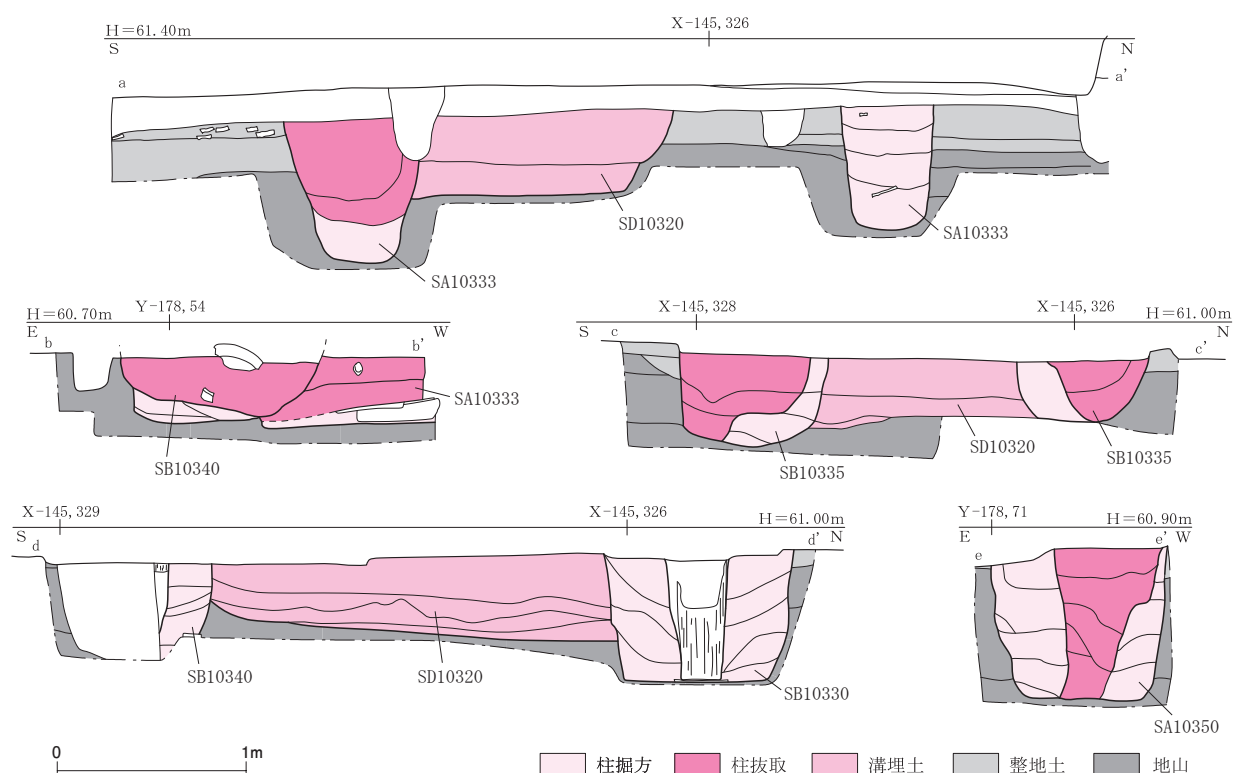


図248 断割断面図 1:40 (断割位置は図247参照)



図249 SD10320とSB10335柱穴との重複関係(北東から)

3 期

掘立柱建物SB10340 梁行1間以上、桁行4間以上の東西棟。柱間は3.0m(10尺)等間。柱掘方は、最大で1.0×1.2m、多くは0.8m四方。深さ60cm以上で、底面に磚を敷くものがある。SD10320を切る。

柱穴列SA10322 南北1間分を検出した。柱間は2.7m(9尺)等間。柱掘方は0.6~0.7m四方。深さは残存部で10cm程度であり、大部分は削平されたと考えられる。

4 期

掘立柱建物SB10330 梁行1間以上、桁行4間以上の東西棟。柱間は3.0m(10尺)等間。柱掘方は0.8m四方、深さ70cm。断ち割った3基のうち、2基に柱根が残ってい



図250 SB10330柱掘方の遺物出土状況(西から)

た。一方の柱根は長さ60cm、直径25cmで、全体的に丸く丁寧に加工されている。柱穴の底面には薄板片や桧皮片、曲物底板片などが敷かれており、礎板の代用品と考えられる。もう一つの柱根は遺存状態が悪いが、底面には礎版を敷く。柱掘方底面から、軒丸瓦6301Bが出土した(図252)。SD10320を切る(図247・248d-d')。

掘立柱塼SA10350 断面で確認した2間分を含む、東西11間分を検出した。柱間は3.0m(10尺)等間。柱掘方は1m四方、深さ120cm。柱根は確認できず、すべて抜き取られている。他の柱穴と比較して柱穴寸法、深さともに大きい(図247・248e-e')。

掘立柱塼SA10355 断面で確認した1間分を含む、東西

9間分を検出した。柱間は3.0m（10尺）等間。柱掘方は0.6m四方、深さ50cm。柱根を残すものが少なくとも3基あり、そのうちの1本は直径約20cm。上端はささくれ状を呈することから、切り取られたと考えられる。また、底面に磚を敷く柱穴もある。東西塀SA10350とはほぼ同じ位置にあり、性格を同じくすると考えられるが、抜き取られていないものが多いことから、SA10350が先行し、SA10355へと建て替えられた可能性が考えられる。

時期不明

柱穴列SA10323 1間分検出した。柱間は2.7m（9尺）。柱掘方は0.5m四方、深さ50cm程度。

柱穴列SA10331 1間分検出した。柱間は2.7m（9尺）。柱掘方は0.5m四方。深さは残存部で20cm程度。

南北溝SD10339 東調査区中央部付近で検出した溝。幅0.6m程度、長さ約4.0m分を検出した。SD10320と接続する可能性がある。須恵器の火舎獣脚片が出土した。

溝状遺構SX10354 西L字調査区で東半の南北約5.0m分を検出したが、全体の形状については不明である。多量の土器のほか、焼土や炭を含む。

中世以降の遺構

南北溝SD10347・10348・10349・10351 西調査区で検出した4条の南北溝群。長さ2.0m以上、幅0.4m前後で、深さ10～20cm。埋土に奈良時代の遺物を多数含む。SD10351からは軒丸瓦6314Eが出土した。

大土坑SK10325・10326・10328・10329 東調査区中央から東寄りで検出した大土坑群。もっとも大きいSK10325は、南北5.0m以上、東西3.3mで、南は調査区外へのびる。深さ80cm。SK10326は、東西2.8m以上、南北約3.3mの隅丸方形を呈する。深さ約90cm。SK10325に切られる。SK10328は、南北3.5m、東西4.4mの不定形な土坑。深さは70cm以上。SK10329に切られる。SK10329は、南北2.0m、東西2.6mの長方形を呈する。深さ60cm。これらの大土坑の性格は不明であるが、埋土は共通して黒褐色を呈し、粘土質である。また後述のようにSK10325を中心として、14世紀代の土器が多量に含まれることから、廃棄土坑あるいは井戸などの用途が考えられる。

土坑SK10332・10341・10342・10343・10353 上の大土坑よりも小型であるが、複数基の土坑を検出した。大きさは、直径1.5m前後の円形から楕円形を呈するものが多い。これらからも奈良時代から中世の土器が多量に出土

した。SK10353は、直径2m前後、深さ150cm。堆積土の大半が黒褐色を呈する腐植土であり、井戸の可能性が考えられるが、木杵などは出土しなかった。埋土からは、奈良時代～中世までの土器、瓦、曲物片などの木製品とともに、車輪石が出土した。

（芝康次郎）

4 出土遺物

土 器

第501次調査では、灰色砂などの整地土、溝、土坑などの遺構を中心にコンテナ21箱分の土器が出土した。土師器・須恵器・陶磁器など、時期も奈良時代から近代にいたるまで多様だが、そのなかでも奈良時代および中世と考えられる遺構の年代決定に関わる土器を中心に報告する（図251）。

東西溝SD10320出土土器 SD10320では、土師器と須恵器が主に出土し、このうち9点を図化した（1～8、64）。8のみ下層出土、それ以外は上層出土。1～3は土師器であり、1・2が皿A、3が杯C。いずれも内面下半に1段斜放射暗文、さらに3は上半に螺旋暗文を施す。1・2はともにa手法によるが、3は底部が欠失し調整不明。

4～8、64は須恵器である。4は杯BⅠで、口径19.0cm、器高6.9cm、体部外面に降灰する。5・6とも杯BⅡだが、5は後円部内面に煤が付着しているため、灯火器として使用されたものだろう。胎土の特徴からⅡ群とみられる。6は杯BⅡで、内面全体に朱墨が付着しており、底面が磨滅する。7は土師器杯Aを還元焰焼成した稀少な個体。ただし、底部はロクロケズリ調整で、須恵器杯Aと同一なため、土師器杯Aを須恵器の技法で製作したとみるべきか。8は下層出土の高杯で、口径15.0cm、器高6.2cmと低脚で、内面全体に降灰する。64は口径57.6cmをはかる大型の甕。外面に縦方向の平行タタキを施す。このほか、肩部に「神万呂」と墨書された甕の破片も出土した。形態や暗文などの特徴から、これらはいずれも奈良時代前半の所産と考えられ、SD10320の埋没年代を知る手掛かりとなる。

柱穴SP10324出土土器 須恵器などが出土した。図化できたのは2点で（11・63）、11は皿AⅡ、復元口径17.8cm、器高2.9cm。63は装飾壺の鳥部分か。胴体下部の右斜めに剥離痕があり、当初は器壁から斜め上方に取り付けられたと考え、そこから壺と推定した。上面から側面を指

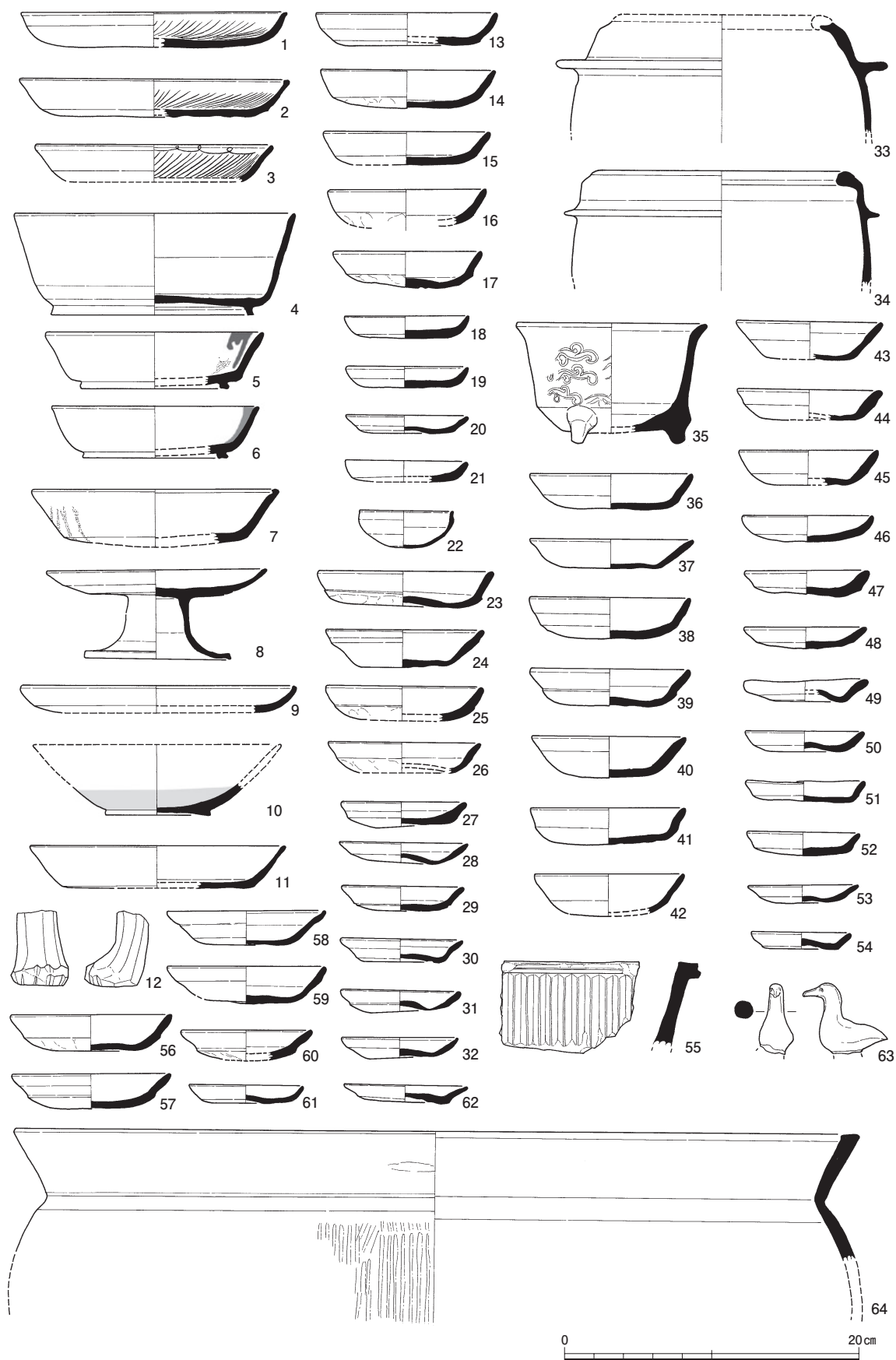


図251 第501次調査出土土器 1 : 4

ナデによって調整する。11は奈良時代の所産だが、63の製作年代は不詳。

南北溝SD10339出土土器 12は須恵器の獣脚片である。灰白色を呈し、残存高5.1cm、最大幅3.9cm。篋状の工具を押しあてて指を表現し、ヘラケズリによって面取りする。形状からみて、火舎にともなう獣脚と推定できる。

溝状遺構SX10354出土土器 土師器皿、緑釉陶器碗などが出土し、このうち図化できたのは2点である（9・10）。9は土師器皿Aで、復元口径18.4cm、器高1.9cm、底部調整は不明。10は緑釉陶器碗AないしCである。推定口径18.6cm、全体が低平かつ底部中心へ向けてやや内彎する蛇ノ目高台がつく。なお、緑釉陶器碗はこれ以外に整地土から2個体分が出土した。SX10354出土土器は、平城Ⅵ～Ⅶの特徴を有しており、本遺構が平安時代初頭頃に廃絶したことを示す。

南北溝SD10349出土土器 以下は中世土器で、その多くを土師器皿（皿N・S）が占める。口径を計測すると、14cm前後の大型品（13・14）、11cm前後の中型品（15～17）、8cm前後の小型品（18～21）と大きく3つに分けることができる。20のように若干底部が押し上げられる個体も認められるが、いわゆる「へそ皿」は、まだ明確ではない。色調的には、にぶい橙色や褐色を呈する、いわゆる赤土器が多い。

土坑SK10353出土土器 ここでも南北溝SD10349と同じく土師器皿が多い。口径をみると、11cm前後をはかる大型と（23～26）、8cm前後の小型（27～32）にわかれ、14cm前後の一群が消失する。どれも灰白色や灰オリーブ色を呈する、いわゆる白土器が大半である。28・30・31のような「へそ皿」が確実に存在することもふくめ、先の南北溝SD10349よりも時期的に後出する一群とみられる。なお、整地土である灰色砂出土土器でも同様な法量分布を示す（55～62）。ただし、こちらは赤土器も混じるという違いがあるため、SK10353に若干先行するのだろう。

大土坑SK10325出土土器 前出の2基の遺構から出土した土器より多様な構成を示すことを特徴とし、土師器皿以外にも土師器釜や瓦質土器などを含む。33・34は、白土器の特徴である灰白色の胎土で、肩部に鐙を付け、口縁部先端を外側へ折り返して丸め、全体をナデ調整した大和H1型の土師器釜（菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』、1983）。これらの形状的特徴は、奈

良市宝来町遺跡SD02出土品などと類似し、14世紀代の特徴を示す。36～54は土師器皿。口径が11cm前後の大型品（36～42）、9cm代の中型品（43～45）、8cm前後（46～52）および6cm代（53・54）の小型品と、3つに分類できる。SD10349出土土師器皿と比較すると、大型品が14cm代から11cm前後へと法量が縮小することから、SD10349よりも新相を示し、SK10353出土土器と時期的に近いと考えられる。

35と55は瓦質土器。35は三足香炉で、復元口径12.6cm、器高8.2cmと小型の筒型を呈する香炉Iで、体部外面に雲形の文様をスタンプする（坪ノ内徹「中世南都の瓦器・瓦質土器」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』、1990）。脚部が外側に付くこと、口縁部直下を強くヨコナデし、起伏に富んだ体部とするなどの特徴から、15世紀以降の香炉Iよりも古相と判断しうる。55は不明品の口縁部破片。口縁部上端外面に連子状の文様（連子文と仮称）をスタンプする。風炉の口縁部に同様の意匠を有する例があるものの、本個体は円形でなく方形の可能性が高く、方形の浅鉢ないしは深鉢と推定しておく。なお、類品は薬師寺など、近隣でも出土例がある。第501次調査では、このほかにも瓦質土器が土坑などから数点出土した。

中世土器の変遷と評価 以上、中世出土土器を概観してきたが、諸特徴からみた出土土器群は、年代の古い順から、SD10349→灰色砂（整地土）→SK10353・SK10325と整理するのが妥当だろう。これまでに触れた中世土器の特徴は、①瓦器碗が認められない、②SK10325では瓦質土器が一定量存在するが、これまでにあまり確認されてこなかった初現的な要素をもつ、③各土器群を比較すると、土師器皿は赤土器から白土器へと変化する、という3点に集約できる。こうした諸特徴を加味し、第501次調査出土の中世土器は、主として14世紀代の所産であり、瓦質土器の出現あるいは白土器の普及といった、中世後半における土器生産の転換期の様相がうかがえる良好な土器群と評価したい。（青木 敬）

瓦 磚

第501次調査で出土した瓦磚類の一覧を表40に示した。出土した軒瓦は奈良時代のものから近世のものまでを含み、特に法華寺の変遷にともなうとみられる奈良時代各段階の軒瓦が多くみられる。図252-1は6282BaでⅢ-1期に位置付けられ、「宮寺」所用瓦とされる。今回の調査

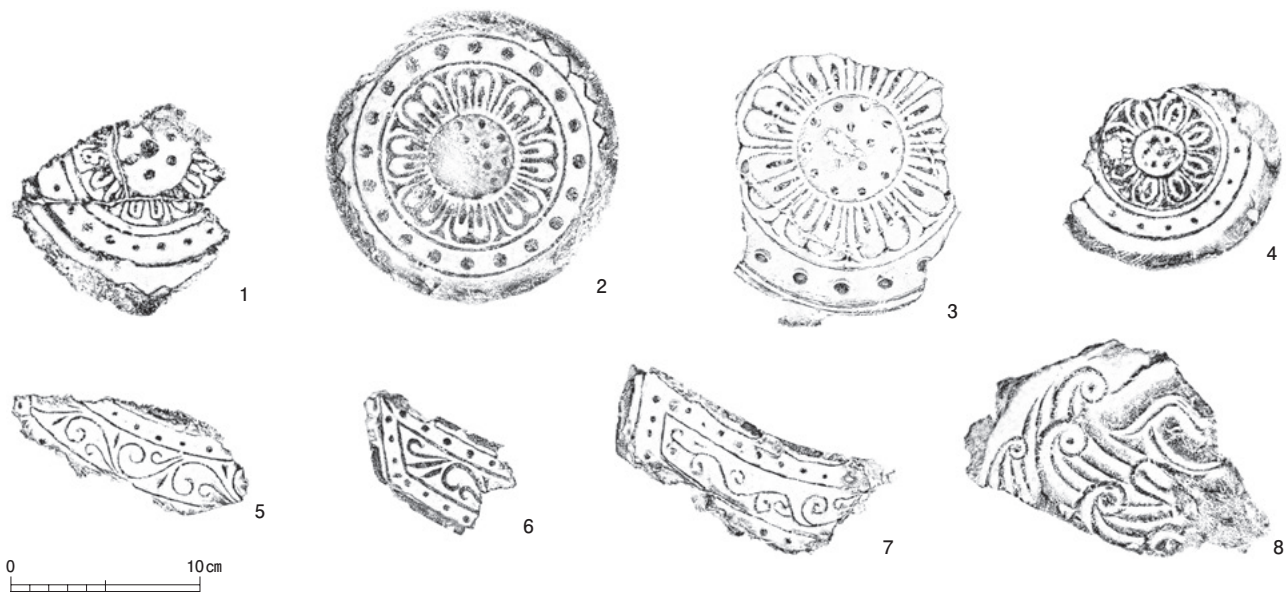


図252 第501次調査出土瓦磚類 1 : 4

表40 第501次調査出土瓦磚類一覧表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6134	A	1	6643	Ab	1	丸瓦(三彩)	6
6138	G	1	6664	C	3	丸瓦(灰釉)	3
6271	C	1		D	1	丸瓦(刻印)	1
6282	Bb	1	6667	A	5	平瓦(三彩)	8
	Ca	1	緑釉付	D	2	平瓦(緑釉)	18
6301	B	1	6691	A	1	平瓦(灰釉)	1
	I	1	6714	A	1	平瓦(褐釉)	1
	L	1	6721	A	1	平瓦(自然釉)	2
6308	Aa	1		G	1	平瓦(刻印)	1
6314	E	1		J	2	平瓦(ヘラ書)	1
巴(中世)		3	6767	B	1	平瓦(格子タタキ)	4
巴(中世～近世)		3	6768	B	1	鬼瓦 I A	1
古代		1	重弧文		2	面戸瓦	1
中世		1	古代		2	割熨斗瓦	1
型式不明(奈良)		11	中世		2	螭羽瓦	1
型式不明		1	近世		4	雁振瓦	2
			型式不明(奈良)		16	磚	5
			緑釉付		2	用途不明道具瓦(自然釉)	1
			顔ナシ緑釉付		1	用途不明道具瓦	3
						土管	1
計 30			計 49			計 63	
丸瓦			平瓦			磚 凝灰岩	
重量	174.248kg		653.152kg			33.508kg	0.042kg
点数	1568		6413			17	1

でも軒平瓦6721型式の各種が出土しており、それらと組み合わせられたのであろう。整地土の赤褐色土から出土。2は6301BでⅡ-1期とされる。いわゆる興福寺式であるが平城宮内では東方官衙地区などにみられ、法華寺旧境内からもこれまでに数点出土している。SB10330の柱掘方底面から出土。3は6301Lで大型品である。鳥衾にもちいられたものであろうか。SB10335の柱抜取穴から出土。4は6314Eで小型品である。Ⅱ-2期に位置づけられる。SD10351から出土。5は6667AでⅡ-1期に位置付けられる。今回の調査では出土していないが、軒丸瓦6285Aとのセットで光明子邸所用瓦とされる。整地土の褐色礫混じり土より出土。6は6691Aである。Ⅲ-1期に位置づけられ、皇后宮所用瓦とされる。SK10325より出土。7は6714Aである。Ⅲ-2期に位置づけられ、法華寺

金堂所用瓦とされる。8は鬼瓦平城宮ⅠA式である。Ⅰ期の製作とされる。SK10325より出土。このほかにも多くの軒瓦が出土している。

(川畑 純)

冶金関連

羽口片が7点出土した。いずれも破片であるが、東西溝SD10320の埋土やSK10325などから出土している。

石器・石製品

検出遺構には直接関係しないが、奈良時代以前の様相を知るうえで重要な遺物が出土した。

1は車輪石。外形はほぼ円形を呈し、ほぼ半分を欠損する。復元外径は11.4cm、内孔径は5.7cm。厚さは1.8cmで底面は内孔側に向かって上がる。外斜面は、放射状匙面とその間の頂部からなり、頂部には2本の凹部と1本の突部を1単位とする彫刻が施される。これにともなって外端部は明瞭な凹凸をもつ。裏面には外端部から内側に0.5cmのところ明瞭な段をもち、これが全周する。安山岩製(脇谷草一郎の鑑定による)で、濃紺色を呈し光沢をもつ。SK10353出土。この車輪石は、外端部の凹凸や底面が立ち上がる形態的特徴から、古墳時代前期でも古相に位置づけられる(三浦俊明「車輪石生産の展開」『待兼山論集』大阪大学考古学研究室、2005)。本調査区には、古墳時代の遺構やその他の明確な古墳時代遺物は出土していないが、この車輪石の出土は周辺部での前期古墳の存在を想起させる。

2はナイフ形石器。横長剥片の背面にボジ面を有する、いわゆる有底剥片を素材とする。打面側に背面から二次加工を施す。刃部の大半がガジリによって欠損する。サヌカイト製。整地土の褐色礫混じり土から出土。周辺の旧石器時代遺跡として法華寺南遺跡を挙げるこ



図253 第501次調査出土石器・石製品 1 : 2

ができるが（『平城京二条二坊十四坪発掘調査報告』、2003）、そこでは縦長剥片製小型ナイフ形石器が主体となり、後期旧石器時代前半期に位置づけられる。このナイフ形石器は瀬戸内技法によるものであり、それらよりも後出のものと考えられる。（芝）

5 まとめ

左京二条二坊十五坪は、奈良時代前半期には藤原不比等邸、後半期には法華寺境内地と考えられているが、発掘調査事例が少なく、考古学的には様相が不明であった。そのなかで本調査は、本坪におけるこれまでで最大規模の調査である。調査成果は、以下のように要約できる。

奈良時代の重複する遺構の確認 調査区の位置は、およそ坪心からやや北よりにあたる。調査によって、複数の建物や区画施設が見つかり、遺構の重複関係や柱筋のそろい方から4期に区分できる（図254）。時期ごとに建物群と区画施設との関係についてまとめると、以下のように概括できる。すなわち、1期には南北を幅広の溝によって区画する。この東西溝が埋められたのち2、3期には南北棟や東西棟が建てられ、続く4期には再び東西堀によって、南北を区画する。1期には東西溝1のみが該当するため全体像が不明であるが、2、3期に南北の坪心をこえて建物が展開し、それが4期に東西棟に変化して、南北の坪心を堀によって区画するという状況が見てとれる。坪を細かく区画するのは、奈良時代後半期に平城京内で広く認められる現象である。当初、坪を区画せずに大きく利用して、後に区画して利用するというあり方は、本坪でもあてはまる可能性がある。

中世の遺物を多量に含む遺構群の検出 東調査区の広い範囲で検出された大土坑、土坑群および南北溝群では、中世の特に14世紀代の遺物が多量に検出された。これらの土坑群の性格は不明であるものの、埋土や遺物の内容から短期間に埋まった廃棄土坑あるいは井戸の可能性が考えられる。これらから出土した土器群は、瓦質土器の出

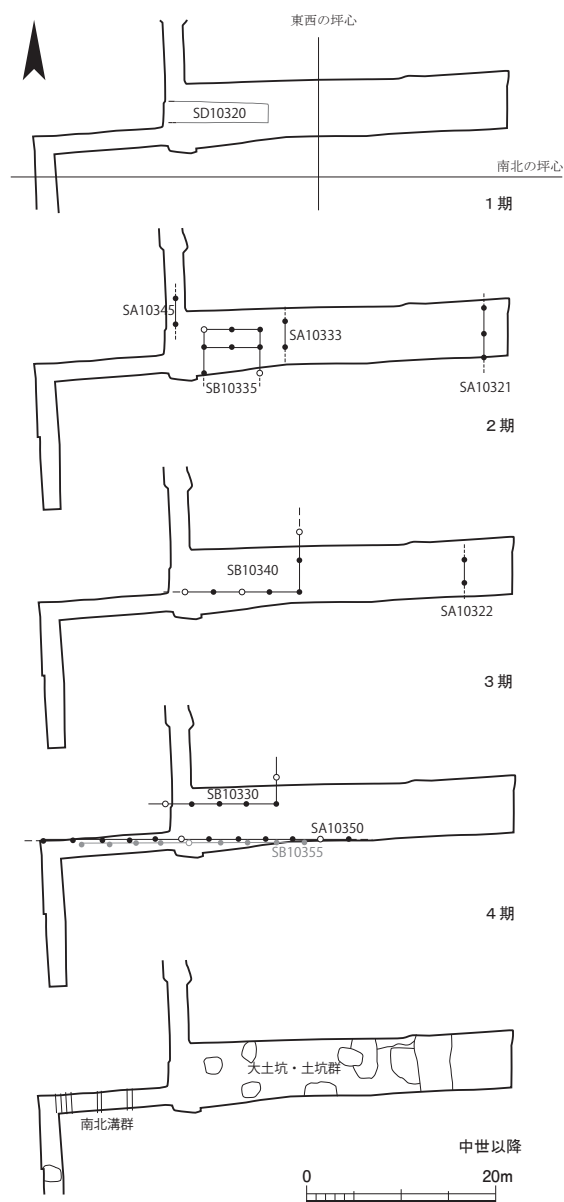


図254 第501次調査遺構変遷図 1 : 800

現、白土器が普及していく様子など、中世後半の良好な資料と評価できる。

今回の調査は、調査区一帯で予定されている開発計画上、変則的な調査区を設定して実施した。上述の遺構変遷や土地利用に関しては、今後実施されるであろう周辺の調査を含めて総合的に検討していく必要がある。（芝）